

# 職縁依存社会からの脱却

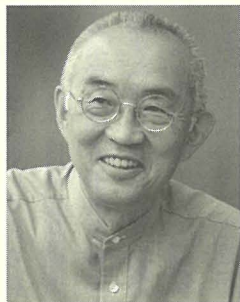
東京大学名誉教授  
つきおよしお  
月尾嘉男

## 無縁にまで到達した現代社会

昨年一月にNHKが放送した「無縁社会」―無縁死―三万二千人の衝撃―という番組は、内外に問題が山積しているにしても、一見、平和で豊穡な日本の内側に、誰にも看取られないことなく消滅していった人々が、判明しただけでも一年に約三万二〇〇〇人が存在していたという衝撃の事実を紹介した。昨年の菊池寛

賞を受賞したことでも、その衝撃が証明されているし、番組の影響により、死者に年金が支払われていた事実も浮上してきた。

この無縁に使用されている「縁」という文字は社会の関係の変遷を明示する概念である。狩猟採集が生産の中心であった時代には、家族など少数の集団で移動しながら生活していたから「血縁」が関係の基盤であった。農耕牧畜が登場すると、耕地



や牧場の周辺に定住し、しかも穀物の収穫や家畜の出産のときに共同作業を必要とするため、定住生活をしている地域が社会関係の基盤となる「地縁」が重要になってきた。

さらに工業生産や情報生産が社会の主流になると、多数の人々が工場やオフィスに通勤する結果、「地縁」は希薄になり、職場の関係「職縁」が生活の中心になってきた。都会などでは隣家の事情は不明でも、職場の隣席の家庭の事情には精通しているという時代になったのである。そして平均年齢の増大により、職縁という人間関係を維持していた唯一の場所から切断される時間が長期になり、ついに「無縁」にまで到達したのである。

## 仕事中心の過去の「縁」

ある意味では世界全体から見ても異常な現代の日本の状況を変革していかねばならないが、その糸口となるのが、血縁から地縁を経由して職縁までの「縁」に共通する特徴である。それはすべてが生産とか仕事に関係する場所に由来するということである。そこでさまざまな時代の人生において、仕事に関係する時間がどれほどの比率になっているかを概略の計算で推定してみると、無縁に到達する経過が浮上してくる。

以下は〇歳時点での平均寿命であるが、狩猟採集が中心であった縄文

時代は約一五歳、大半が農業に従事していた江戸時代は男女とも約三六歳と推定され、いずれも人生の大半の時間は生産に従事していたから、血縁や地縁で安定した社会を構成していた。ところが現代は男性で約七九歳、女性は世界最長の約八六歳である一方、依存すべき職縁は六〇歳前後で消滅し、そこから二〇年近くは地縁も職縁もない生活を余儀なくされることになる。

## 新縁の構築が有縁社会への糸口

きわめて雑駁な分析であるが、就業者数の八割が企業に雇用されて給与生活をしている現代日本では、人生の最後の二〇年近くは職縁から縁遠くなる人々が大量に存在していることになり、その一部が無縁社会で生活せざるを得ない境遇になるという仕組みである。この対策として、定年以後の雇用問題を社会制度として解決することも必要であるが、一人ひとりが対応を用意していく課題でもある。その要点が生活重視への

転換である。

一九八〇年代初期に旧総理府が実施した調査で、人生の目標は仕事か仕事以外かという質問に、約二八パーセントが仕事、約一四パーセントが仕事以外（それ以外は曖昧な回答）と回答していた。仕事人間が仕事以外人間の二倍であった。このような仕事もしくは企業に忠実であった人々が職縁以外の「縁」を構築する余裕のないまま、定年とともに職縁を喪失していったことが、無縁社会を異常なまでに拡大してきた有力な原因である。

実行すべきことは明瞭である。職縁で生活している期間に、それ以外の「縁」を用意しておくことである。趣味を共通とする「遊縁」でも、社会奉仕を共通とする「奉縁」でも結構である。幸運なことに、一九六〇年代には月間二〇〇時間余であった労働時間は、現在では一五〇時間ほどに短縮している。この年間に獲得した約六〇〇時間を「新縁」の構築に利用することこそ、無縁社会から有縁社会へ脱却する有効な方法となるはずである。